

Super
English
Language
High School

3

『英語で議論できる効果的な発信能力を育成するための
ステップアップ・プログラムの研究開発』

平成18年度（第3年次）

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール

研究開発実施報告書 広島市立舟入高等学校

	研究開発の概要	…	2
	研究開発の概要 3カ年		2
	研究開発の概要 単年		11
1	SELHi 学校名	…	15
2	研究開発実施期間	…	15
3	研究開発課題	…	15
4	今年度の研究計画	…	15
	(1) 第三年次(平成18年度)研究計画		15
	(2) 第三年次(平成18年度)研究計画の詳細		16
5	研究開発の内容と評価	…	18
	(0) 本年度研究開発の前提となること		
	(1) 「目的」と「評価」		18
	(2) 「改善」と「指導」		19
	(3) 研究開発と指導実践の対応図		21
	(4) 指導段階の4類型化		23
	(5) トレーニング型の指導技法の3類型化		24
	(6) 「負荷」の種類とトレーニングの段階化		25
	(7) トレーニング型の授業科目における位置づけ		26
	(8) トレーニング型の学習活動における「評価者」		27
	(9) トレーニング型の学習活動の「大技」「小技」		27
	(10) 「英語による論証能力」を測定する WSA テスト		28
	(11) 純粋な即興発話の能力を測定する WSA + SA テスト		30
	(1) ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究		
	(1) 第1学年 形成期の指導		34
	(2) 第2学年 創造期の指導		40
	(2) スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究		
	(3) 第3学年 加速期の指導		46
	(3) 指導評価シラバスの開発とそれに関わる研究開発3カ年間の成果と考察		
	(1) 目標値の達成度について		55
	(2) WSA テストの簡易版の構想		56
	(4) 研究開発3カ年間の成果と考察に基づく SUP4 の構想		
	(1) SUP4 における新しい指導時期の位置づけ		58
6	生徒の英語コミュニケーション能力の向上と評価	…	60
	(1) WSA+SA テストに基づく論証能力(議論するための発信能力)の評価		
	(1) 論証能力の定義と評価		60
	(2) ライティング能力におけるパフォーマンスの変化		64
	(3) 半即興性のスピーキング能力におけるパフォーマンスの変化		67
	(4) 純即興性のスピーキング能力におけるパフォーマンスの変化		69
	(2) 外部の標準化された指標に基づく評価		
	(1) 実用英語技能検定の SELHi 研究における位置づけとこれに基づく評価		71
	(2) GTEC for Students の研究における位置づけとこれに基づく評価		73
	(3) 大学入試センター試験		77
7	校内の英語教育の改善状況	…	78
8	研究開発組織	…	80
9	外部講師の講演・授業外活動の記録	…	90
10	今後の研究計画	…	91
資料編			
資料1	トレーニング型の学習活動「大技」「小技」の実践記録	…	95
資料2	シラバス(研究対象の部分のみ)	…	116
資料3	SELHi 研究開発成果最終報告会の研究授業の指導案	…	143
資料4	「『英語が使える日本人』の育成のためのフォーラム 2007」模擬授業 指導案	…	144
資料5	SELHi 研究開発における評価・測定の計画	…	177
特別付録	モノログ・ペアワーク用の『ワード・カウンター』		うら表紙

平成16～18年度 広島市立舟入高等学校 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール 研究開発の概要 3カ年

- 1 研究開発実施期間 平成16年度～平成18年度（第3年次）
- 2 研究開発課題 『英語で議論できる効果的な発信能力を育成するための
ステップアップ・プログラムの研究開発』
- 3 研究開発課題の設定理由

（1）本校の英語教育のねらい

広島市は、人類最初の被爆地としての教訓をもとに、平和の願いを世界に発信できる人材の育成を目指している。本校では、国際理解教育の充実を教育目標として掲げ、普通科・国際コミュニケーションコース（以下、「国際コース」）を設置している。この国際コースでは、英語を使用して国際的な意志疎通の場面で将来活躍できるレベルの発信能力を持つ生徒の育成を最終的な目標として、英語教育の充実に取り組んでいる。

（2）英語の実践的コミュニケーション能力における生徒の現状と特性

本校に入学する生徒は、全般的に本校の英語教育に強い期待を抱いている。とりわけ「国際コース」に属する生徒は、英語学習に対して極めて強い興味・関心を示しており、外国語系大学への進学など、英語学習への積極性を裏付ける進路実績も実現している。

一方、卒業時点で本校の「国際コース」が目標としている英語力、『国際的な意志疎通の場面で将来活躍できるレベル』と比較した場合、第三学年2学期の時点で、『ディベートやディスカッションにおいて、留学生と流暢かつ適切に議論できる程度』の発信能力を必ずしも全ての生徒が達成してはいないという実態がある。

この現状に至る生徒の傾向として、「ライティング能力」においては、第三学年で、九割以上の生徒が、2000語レベルの英文を論理的に書けるという「強み」がある。その一方で、「スピーキング能力」においては、第二学年で、（ア）インプットの不足により、発信のために使用可能な表現が十分備わっていない、（イ）使用可能な表現は持っているが、その処理能力が不足しており、適切な表現形態に結びつかないという個人差が混在しており、双方に対処する指導が必要である。また第三学年では、日常の出来事や自分の経験を述べることはできるが、議論ではその能力が発揮しきれないとの実態がある（平成15年度、校内研究授業の研究協議より）。

（3）「国際コース」の生徒の現状を改善するための「課題と解決策」

「国際コース」における生徒の現状と特性を考慮し、生徒の「ライティング能力」における「強み」を生かし、これを「スピーキング能力」へと移行・般化させるための段階的な指導が有効と考えられる。また、そこで培った「スピーキング能力」を「議論できる発信能力」へとさらに高めるための段階的な指導、いわば「ステップアップさせるプログラム」とそれを含む教育課程の系統化が必要である。詳しくは、以下の通りである。

（1）「ライティング能力・スピーキング能力」に関して、現状における（ア）及び（イ）の状態から「インプットした表現を、ライティングだけでなく、スピーキングにも素早く使用できるレベル」まで高める。そのため、（ア）にはインプット練習のソフト開発、（イ）にはコンピュータを通じた「チャット」など、移行過程をわかりやすくする工夫をし、各指導方法の関連性や有効度の検証を通して、段階的な指導の方途を構築する。

（2）いわゆる「議論するための能力」の開発に関して、上記（1）に続いて、「意図した表現が素早く出てくるレベル」から「活発な議論ができるレベル」まで高める。そのために一方だけでなく双方向の議論において論拠を有効に発信できるよう、クリティカル・リスニングやトーキング・マッチなど移行過程をわかりやすくする工夫をし、各指導方法の関連性や有効度の検証を通して、段階的な指導の方途を構築する。

（3）「指導評価シラバス」に関して、「本校の英語教育のねらい」の達成に向け、上記（1）、（2）の指導方法を位置づけ、科目間の系統性がはっきりとした指導評価シラバスを作成する。

（4）展望

本指定では、上記（1）、（2）、及び（3）を取り上げて、研究開発を行い、『英語圏からの留学生と流暢かつ適切に議論できる程度の英語力』を育成する。また、研究開発によって得られた知見を本校の普通科・普通に通ずるとともに、各種研究会での発表、学会誌への投稿を行うなど、逐次普及に努める。

4 3年間の取組内容(年次別)

(1) 第一年次(平成16年度)

「基礎的研究の期間」と位置づけて、指導方法の理論構築と試行的実施、及び評価方法の整備をした。

- (1) 研究内容 の「ライティングからスピーキングへの段階的な指導」に関して
 - 指導に関する理論的背景を整理した
 - 指導段階ごとの指導計画を作成した
 - 指導の補助となるコンピュータソフト(広島市立大学)を活用した
 - 各段階の指導法(コンピュータソフトの活用含む)を実施し、その適否を検証・検討した
- (2) 研究内容 の「スピーキングから議論活動への段階的な指導」に関して
 - 指導に関する理論的背景を整理した
 - 指導段階ごとの指導計画を作成した
 - 各段階の指導法を試行的に実施し、その適否を検証・検討した
- (3) 研究内容 と の「ライティング能力」と「スピーキング能力」の評価の方法に関して
 - 能力を定義し、評価の指標を整理した
 - 設定した指標に基づき、各能力の評価を試行した
 - 試行の結果に基づき、評価指標と評価方法の妥当性と信頼性を検証・検討した
- (4) 研究内容 の「指導評価シラバスの開発」に関して
 - 「総合的評価規準」を作成した
 - 「科目ごとの評価規準」を作成した

(2) 第二年次(平成17年度)

「実践的研究の期間」と位置づけて、段階的な指導の実践、及び評価の実践をした。

- (1) 研究内容 の「ライティングからスピーキングへの段階的な指導」、及び研究内容 の「スピーキングから議論活動への段階的な指導」に関して
 - 指導計画に基づいて、指導を実践した
 - 指導段階ごとに、各能力の評価測定をした
 - 評価測定の結果を統計処理し、指導法の適否を検証・検討した
 - 上記の結果に基づいて、指導計画の修正と精緻化をするともに、第三年次への課題を整理した
- (2) 研究内容 の「評価の実践」に関して
 - 評価規準(総合的・科目ごと)に基づく教師による指導と生徒による自己評価を実践した
 - 上記の評価に基づいて、科目ごとのシラバスの目標への適合度を検証・検討した
 - 上記の結果に基づいて、シラバスと評価規準の改善をしたとともに、第三年次への課題を整理した

(3) 第三年次(平成18年度)

「発展的研究と研究全体の評価の期間」と位置づけて、段階的な指導の洗練、及び指導評価シラバスの系統化をした。

- (1) 研究内容 の「ライティングからスピーキングへの段階的な指導」、及び研究内容 の「スピーキングから議論活動への段階的な指導」に関して
 - 第二年次に修正と精緻化をした指導計画に基づいて、指導を実践した
 - 上記の結果と第二年次の結果を比較し、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法、教材・装置等の完成を以て、研究全体の成果とした
- (2) 研究内容 の「科目間の系統的なつながりの研究」に関して
 - 第二年次に改善したシラバス、及び評価規準に基づいて、指導と評価を実践した
 - 上記の結果と第二年次の結果を比較し、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、科目間の系統的なつながりを備えたシラバス及び評価方法の完成を以て、研究全体の成果とした

5 研究開発の概要(成果と課題)

(1) 成果と課題の概要

表1 研究主題・研究年次ごとの成果と課題

		研究開発年次		
研究番号	研究主題	第1年次	第2年次	第3年次
		平成16(2004)年度	平成17(2005)年度	平成18(2006)年度
研究1	ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究	SUP1のステップ1~6の指導実践 学習活動の自己評価 「ぎゅっとeリスニング(広島市立大学)」 ライティング(ピア修正) 暗誦スピーチ 即興スピーチ フォーカススピーチ 簡易ディベート 「即興」をうまく機能させ「流暢さ」を身につけさせることが課題となる	SUP2に基づく指導 FORMATION期 「インプット 話す」 「流暢さ」がスピーキング、ライティングとも有意に向上 CREATION期 「書く 話す」 「適切さ」がライティング、スピーキングとも有意に向上 「流暢さ」がライティングのみ有意に向上 時期ごとの特性を生かした指導計画が必要	SUP3に基づく指導 FORMATION期 「量」を増やす 「FORMATION」から「ACCELERATION」へ 「流暢さ」の急激な伸び(1分モノログで80WPM) CREATION期 「質」を高める 「CREATION」からさらに「CREATION」へ 「適切さ」がスピーキングのみ有意に向上
研究2	スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	SUP1のステップ5~11の指導実践 学習活動の自己評価 フォーカススピーチ ×プレゼンテーション ×クリティカルリスニング ×トーキング・マッチ ディベート ×ディスカッション 「即興性」が必要とされる活動に対して厳しい評価。テーマの難易度に配慮し、即興性を育成することが急務となる	SUP2に基づく指導 ACCELERATION期 「話す 議論する」 「総合指数」がスピーキングのみ有意に向上 「流暢さ」がスピーキング、ライティングとも有意に向上 「適切さ」がスピーキングのみ向上 「量」と「質」のトレードオフ関係を考慮した指導計画が必要	SUP3に基づく指導 ACCELERATION期 「質」を維持して「量」を増やす 「ACCELERATION」から「INTEGRATION」へ 「流暢さ」がスピーキング、ライティングのすべてで有意に向上
研究3	指導評価シラバスの開発	ステップアップ・プログラム(SUP1)のグランドデザインの策定 SUP1「直線型」 SUP2「螺旋型」 数値目標の導入 指導評価シラバスの作成開始	SUP2に基づく指導の実践と評価 「トレーニング型学習活動」の導入 目標値の見直し 指導内容と方法の見直し SUP3の策定	SUP3に基づく指導の実践と評価 SUPの構成概念の整理 「従来型」「トレーニング型」「イベント型」「国際交流型」「指導メソッド」「個人差」「効率化」への対応 SUP4の策定
評価	内部指標 WSAテスト(独自開発) 外部指標 実用英語技能検定 GTEC for Students	WSAテストの開発および信頼性と妥当性の検討 「議論できる英語力」の定義 試行テスト(1回)、WSAテスト(2回)の実施 時期×テーマの分散分析 時期の主効果=練習効果 テーマの主効果=要注意 評定者間の相関=.91~.84	WSAテスト(3回)の実施と指導成果との対応 すべての学年でライティング、スピーキングとも「流暢さ」が有意に向上 「量」と「質」のトレードオフの傾向あり 2級以上の取得者がSELHi指定以前の約3倍	WSA+SAテスト(3回)の実施と指導成果との対応と研究成果の分析・考察 「流暢さ」は不可逆的に向上する 「量」と「質」のトレードオフの傾向あり 「半即興」と「純即興」との乖離を考慮する必要あり TOTALとWRITINGでの急激な伸び

(2) WSA テストに基づく「英語で議論できる発信能力」についてのおもな成果と課題

WSA テストによる論証能力の測定は、平成 16 年 12 月～平成 18 年 12 月まで行った。測定時期は 4 月、7 月、12 月、2 月、対象は国際コースすべて(約 120 名)であった。

〔1〕スピーキングの「流暢さ」は、ほぼ確実に不可逆的に向上 図 1

- ・ WSA+SA テストによる論証能力(とくに SPEAKING)の継続的な評価が、生徒の学習スタイルを変容した
- ・ トレーニング型の学習活動の導入によって、言語・知識を音声化するプロセスが効率的になった
- ・ 数値目標をシラバスやトレーニングに導入し、日頃から自己評価を行わせることで生徒と教師が互いに目的を持って活動に臨むことができた

〔2〕「流暢さ」(量)が向上しても、「適切さ」「正確さ」(質)は必ずしも向上しなかった 図 2

- ・ 「質と量のトレードオフ関係」は避けられない。すなわち「量」の向上を重視すれば「質」が向上しなかった、あるいは「質」の向上を重視すれば「量」が向上しなかったということ
- ・ 「質」の指標のうち、とくに「適切さ(論理性)」は主観的な指標であり、実際には能力が向上していても、テストの回を追うごとに採点者の要求水準も高くなる。従って、評価が厳しくなっていく、見かけ上、向上が見られなかった

〔3〕「スピーキングの即興性が本当に身につくのか」はこれからの課題 図 3

- ・ 普段の授業ではイベント型、トレーニング型ともに「考えて(メモなどを書いて)、話す」ことが普通である
- ・ 授業中、オール・イングリッシュの活動の中でも、突然に意見を求められることは比較的少ない

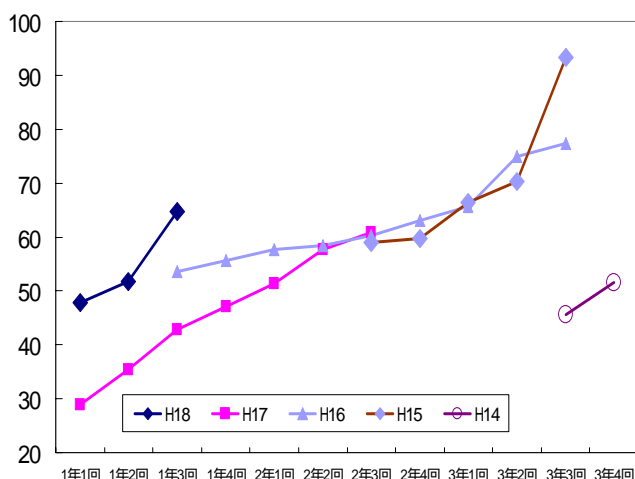


図 1 スピーキングの「流暢さ(WPM)」の推移

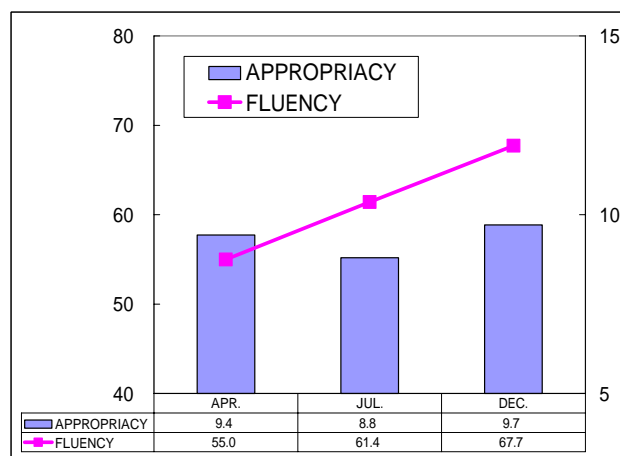
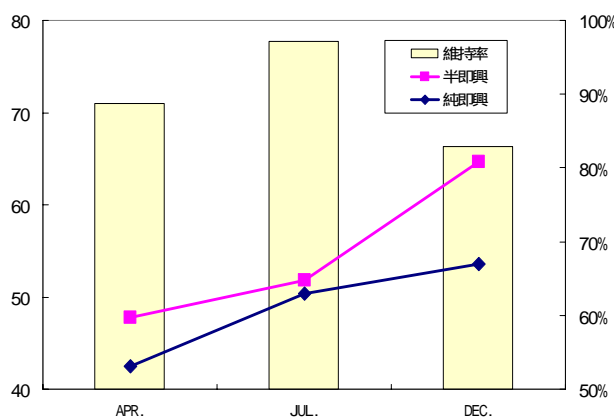
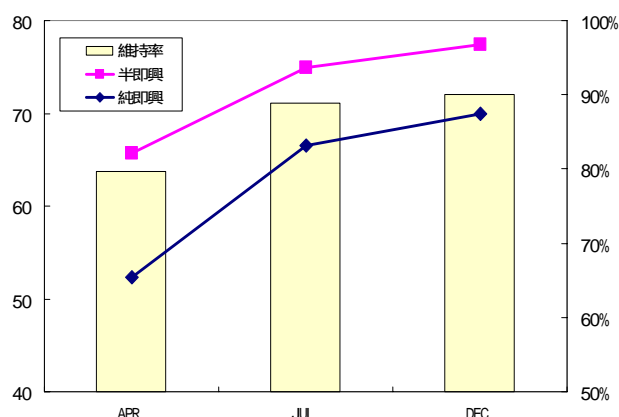


図 2 スピーキングの「流暢さ」と「適切さ」の推移



1 年生(H18入学)



3 年生(H16入学)

図 3 スピーキングの「流暢さ(WPM)」に基づく即興性の維持率 (= 純即興 / 半即興)

(3) 外部の評価指標のおもな成果と課題 表2

表2 外部の評価指標のおもな成果・傾向および課題

評価指標	おもな成果・傾向および課題
実用英語技能検定	<p>取得級が「2級」以上の生徒数が、研究対象のクラスで約2.5倍、学校全体で約4倍に増加した</p> <p>2級以上の合格率を上げるための特化した指導(いわゆる「英検対策」)の徹底も必要と考えられる</p>
GTEC for Students	<p>「社会で必要とされる英語力」であるTOTALの550点に到達する時期が、1年生の12月(平成18年度入学生の平均値)となるなど加速的に前傾した。</p> <p>とくにライティングのスコアは、1年生、2年生ともに今年度5月時点から30点以上向上し、12月時点で130点を超えるなど、飛躍的に伸長した</p>

6 3年間の取組を生かす今後の計画

(1) 研究成果物の継続使用

- ・ステップアップ・プログラム(SUP)、SUP準拠シラバス、トレーニング指導マニュアル、ワード・カウンターなどの成果物は、継続的に使用する。

(2) SUP3からSUP4への発展

- ・研究開発の成果をもとに指導フェーズの改善を試みる(図4)。

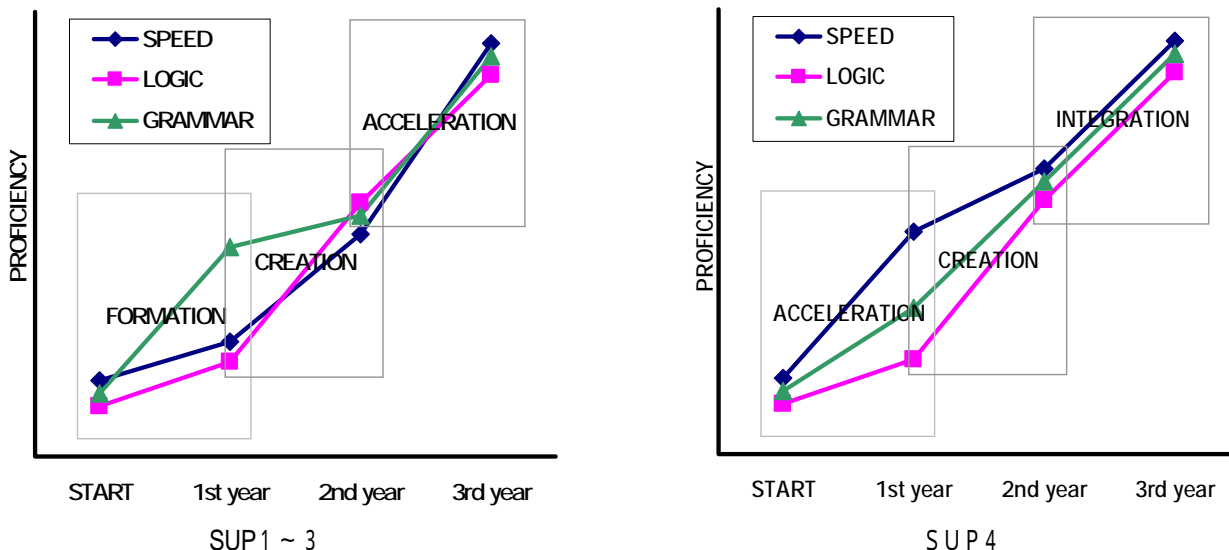


図4 SUP1～3とSUP4の指導フェーズごとの能力伸長のイメージモデル

資料公開

<http://www.funairi-h.edu.city.hiroshima.jp/Frameset.htm>

研究主任名：	西 巖弘
T E L：	082-232-1261
F A X：	082-232-5914

6 3年間の研究計画(詳細)

(1) 3年間の研究計画の詳細

第一～三年次の研究計画		
研究内容	研究方法	研究評価方法
ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究 (第一、二、及び三年次)	<ul style="list-style-type: none"> ライティングからスピーキングへの移行を段階的に指導する 指導の段階ごとの指導方法の適否を検証・検討する 指導内容に則して、コンピュータソフトを開発して使用する <p>[段階] (1) インプットを充実させ、使用可能な表現を個別に増強させる指導と、そのためのソフト開発。 (2) コンピュータの「チャット」を用いて、表現の使用にfluencyを持たせる指導と、そのためのソフト開発。 (3) 論理構成に配慮して作文し、表現の内容に論理性を持たせる指導と、それをスピーチとして発表させる指導。 (4) 実践により、さらに即時性・即興性を持たせる指導(即興スピーチ、実践的ライティング、簡易ディベートなど)</p> <p>ソフト開発に関しては、平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された広島市立大学の英語教育改革案に基づき、同大学の開発する「英文インプット学習システム」を同大学との連携で利用する</p>	<ul style="list-style-type: none"> 段階ごとに、「ライティング能力」、「スピーキング能力」、及び積極性などの「周辺的能力」を測定し、指導方法の適否を検証・検討する 生徒と教師の内省報告を収集し、指導方法の適否を検証・検討する 研究全体を通じて「ライティング能力」、「スピーキング能力」、及び「周辺的能力」の変化を検討して研究の評価をする
スピーキングから議論への移行を図る指導法の研究 (第一、二、及び三年次)	<ul style="list-style-type: none"> スピーキングから議論への移行を段階的に指導する 指導の段階ごとの指導方法の適否を検証・検討する <p>[段階] (1) 一方向から双方向のコミュニケーションへと移行を促す指導(パブリック・スピーチ、プレゼンテーション質疑応答など) (2) 相手の論拠を正確に把握し、自分の意見を論理的に構築することに慣れさせる指導(クリティカル・リスニング、トーキング・マッチなど) (3) 実践により即時性・即興性を高める指導(ディベート、ディスカッション)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「議論能力」、及び積極性などの「周辺的能力」を測定し、指導方法の適否を検証・検討する 指導・研究過程に関する生徒、及び教師の内省報告を収集し、指導方法の適否を検証・検討する 研究全体を通じて「議論能力」、及び「周辺的能力」の変化を検討して研究の評価をする
科目間の系統的なつながりの研究と指導評価シラバスの開発 (第一、二、及び三年次)	<ul style="list-style-type: none"> 各科目の系統的なつながりを反映する指導評価シラバスの構築を段階的に行う <p>[段階] (1) 卒業時点の目標値となる英語4技能の4観点別の総合評価規準の作成 (2) 科目ごとの目標値となる4技能の4観点別の評価規準の設定</p>	<ul style="list-style-type: none"> 総合的及び科目ごとの評価規準の達成度に関して、教師による評価と生徒による自己評価を行う 科目ごとのシラバス内容の適合度を検証・検討し、系統化の妥当性を評価する

(2) 第二年次(平成17年度)研究計画の詳細

第二年次(平成17年度)の研究計画		
研究内容	研究方法	研究評価方法
(1)ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究	主に1・2年生を対象として、指導計画に基づく指導を実践する 1)「ステップアップ・プログラム」の指導内容を「イベント型」と「トレーニング型」に分類し、新たにステップ化する 2)各型の活動を年間のシラバスに位置づけて指導する とくに「ライティング活動」と「スピーキング活動」の両方とも、「単なる模倣・反復」から「即興的・創造的な産出」へと繋げることを強く意図してステップ化し、指導する	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	指導に因る生徒のパフォーマンス(身近だが賛否両論のあるテーマについて「話すこと」と「書くこと」における「流暢さ・正確さ・内容の適切さ」)の変化 英語学習に関する態度の変化
	上記(1)の結果に基づいて、指導計画の修正と精緻化をするとともに、課題を整理し、指導計画を改善して指導を行う。	指導に因る生徒のパフォーマンス(身近だが賛否両論のあるテーマについて「話すこと」と「書くこと」における「流暢さ・正確さ・内容の適切さ」)の変化 「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度
(2)スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	主に3年生を対象として、指導計画に基づく指導を実践する 1)「ステップアップ・プログラム」の指導内容を「イベント型」と「トレーニング型」に分類し、新たにステップ化する 2)各型の活動を年間のシラバスに位置づけて指導する とくに「スピーキング」における「流暢さ」のパフォーマンスの向上を強く意図してステップ化し、指導する	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	指導に因る生徒のパフォーマンス(身近だが賛否両論のあるテーマについて「話すこと」と「書くこと」における「流暢さ・正確さ・内容の適切さ」)の変化 英語学習に関する態度の変化
	上記(2)の結果に基づいて、指導計画の修正と精緻化をするとともに、課題を整理し、指導計画を改善して指導を行う	指導に因る生徒のパフォーマンス(身近だが賛否両論のあるテーマについて「話すこと」と「書くこと」における「流暢さ・正確さ・内容の適切さ」)の変化 「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度
(3)指導評価シラバスの開発	評価規準(総合的・科目ごと)に基づく教師による指導と生徒による自己評価を実践する	科目ごとのシラバスの目標に対する適合度
	上記(3)に基づいて、科目ごとのシラバスの目標への適合度を検証・検討する	
	上記(3)に基づいて、シラバスと評価規準の改善をする	研究の第3年次の指導の成果(生徒のパフォーマンスの変化) 体系的な指導・評価シラバスの完成度

(3) 第三年次(平成18年度)の研究計画の詳細

第3年次(平成18年度)の研究計画		
研究内容	研究方法	研究評価方法
(1)ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究	おもに1・2年生を対象として、新しいシラバス(研究の第二年次に修正と精緻化)に基づいて、「ステップアップ・プログラム」における『形成(Formation)』および『創造(Creation)』の各フェーズの指導を実践する。 研究の最終年度として、とくに以下の3点での発展を試みる。 1) 授業における『指導メソッド』の一層の進化 2) 『個人差』に対する適正な処遇 3) 時間と教育資源の『効率化』を図る指導形態	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	WSA テストによる「流暢さ」・「適切さ」・「正確さ」の各指標の測定。 生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	<u>指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」</u>
	上記(1)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法ならびに「ステップアップ・プログラム(これに関連するコンピュータ・プログラムなどの教材・装置等を含む)」の完成を以て、研究全体の成果とする	<u>指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」</u> 「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度
(2)スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	おもに3年生を対象として、新しいシラバス(研究の第二年次に修正と精緻化)に基づいて、「ステップアップ・プログラム」における『加速(Acceleration)』のフェーズの指導を実践する。 研究の最終年度として、とくに以下の3点での発展を試みる。 1) 授業における『指導メソッド』の一層の進化 2) 『個人差』に対する適正な処遇 3) 時間と教育資源の『効率化』を図る指導形態	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	WSA テストによる「流暢さ」・「適切さ」・「正確さ」の各指標の測定。 生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	<u>指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」</u>
	上記(1)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法ならびに「ステップアップ・プログラム(これに関連するコンピュータ・プログラムなどの教材・装置等を含む)」の完成を以て、研究全体の成果とする	<u>指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」</u> 「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度

(3) 指導評価シラバスの開発	研究の第二年次に改訂したシラバスおよび評価規準(総合的・科目ごと)に基づいて、教師による指導と生徒による自己評価を実践する	科目ごとのシラバスの目標に対する適合度
	上記(3)の に基づいて、科目ごとのシラバスの目標への適合度を検証・検討する	
	上記(3)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにするとともに、科目間の系統的なつながりを備えたシラバス及び評価方法の完成を以て、研究全体の成果とする	<u>研究の第3年次の「指導の成果(生徒のパフォーマンスの変化)」と「目標値の達成度」</u> 体系的な指導・評価シラバスの完成度

平成18年度 広島市立舟入高等学校 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール 研究開発の概要 単年

1 研究開発実施期間 平成16年度～平成18年度（第3年次）

2 研究開発課題 『英語で議論できる効果的な発信能力を育成するための
ステップアップ・プログラムの研究開発』

3 今年度の研究計画

(1) 第三年次(平成18年度)の研究計画 (SELHi 申請時のもの)

・『発展的研究と研究全体の評価の期間』と位置づけて、段階的な指導の洗練、及び指導評価シラバスの系統化をする

(1) 研究内容 の「ライティングからスピーキングへの段階的な指導」、及び研究内容 の「スピーキングから議論活動への段階的な指導」に関して

第二年次に修正と精緻化した指導計画に基づいて、指導を実践する

上記 の結果と第二年次の結果を比較し、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法、及び関連するコンピュータ・プログラムなどの教材・装置等の完成を以て、研究全体の成果とする

(2) 研究内容 の「科目間の系統的なつながりの研究」に関して

第二年次に改善したシラバス、及び評価規準に基づいて、指導と評価を実践する

上記 の結果と第二年次の結果を比較し、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、科目間の系統的なつながりを備えたシラバス及び評価方法の完成を以て、研究全体の成果とする

4 研究開発の概要

〔1〕『ステップアップ・プログラム第3案(SUP3)』の開発 「英語で議論できる能力」の育成に向けた段階的な指導プロセスを構築するための方途を開発し、シラバス作成の基礎とする。

(1) 指導段階の4類型化(表1)

コンベンショナル型…訳読(多読・精読・速読)、文法、語彙増強などの基礎的な学習活動。
 トレーニング型… と を繋ぐための長期反復の訓練活動。
 イベント型… ディベートやディスカッションなど短期の目標となる体験活動。
 国際交流型… 海外の人々と交流を持つなどの実践的な体験活動。

表1 英語とスポーツとの指導段階の対比

STEP	ENGLISH EDUCATION	SPORTS
	CONVENTIONALS	BASIC TRAINING
	TRAININGS	FORMATION TRAINING
	EVENTS	PRACTICE MATCH
	CROSSCULTURAL	REGULAR MATCH

(2) トレーニング型の指導技法の3類型化

音読…学習内容を顕在化。速さ(WPM)、正確さ(発音)、適切さ(プロソディ)を向上。
 暗誦…学習内容を内在化。Imitation から Production へと移行。
 即興…学習内容を自在化。Production を加速。

(3) 段階的な「負荷」を考慮(表2)

トレーニング型においては、音読(Reading)、暗誦(Reciting)、即興(Speaking)のそれぞれに固有の「負荷(load factor)」の段階を考慮し、異なる「負荷」を繰り返し経験させた。

表2 トレーニング型の学習活動における「負荷」の有無

	READING	RECITING	SPEAKING
TIME PRESSURE			
MEMORIZATION			
OPINION FORMATION			
LANGUAGE OPERATION			

(4) 指導技法の共有と継続

指導技法のマニュアル作成…指導プロセスをスタッフ全員でマニュアル化。
 指導技法のビデオ作成…マニュアルに沿った映像を保存。

〔2〕『指導・評価シラバス』の開発 『ステップアップ・プログラム(SUP)』を組み込んだシラバスを作成・活用して、学年間・科目間の体系的な繋がりのある指導と評価を行った。

(1) 作成・活用したもの

年間の授業シラバス(全科目分)。
 学年・技能・観点別の評価規準。

(2) シラバスの公開

公開インターネット・サイト… <http://www.funairi-h.edu.city.hiroshima.jp/Frameset.htm>

(3) 『WSA+SA テスト』の開発と実施 「英語で議論する力(論証能力)」を測定するテストを開発し、実施した。とくに今年度は、これまでの「半即興」に加えて「純即興」のスピーキングもテストした。

(1) WSA テストの目的

生徒の能力の把握・・・議論する力を絶対評価で測定し、パフォーマンスの伸びを把握する。
研究開発の評価・・・上記 に基づき、SUP の適合度など、研究開発の正否を客観的に評価する。

(2) WSA テストの構成(図1)

テーマ・・・身近だが賛否両論のあるもの。

教示・・・テーマについて良い点2つ、悪い点2つ、自分の意見1つを話せ(書け)。

形態・・・LL 教室での一斉テスト(筆記、及び録音)。

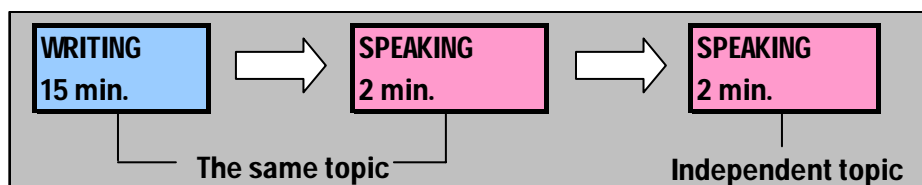


図1 . WSA+SA テストの構成(平成18年度のもの)

5. 研究開発の成果と課題 研究開発の最終年度にあたり、SUP3による指導の結果得られた成果と傾向および課題について表3に呈示する。

表3 評価指標ごとのおもな成果・傾向および課題

評価指標	おもな成果・傾向および課題
WSA+SA テスト	「流暢さ」は、スピーキング、ライティングともほぼ不可逆的に向上した(図2) 「量(流暢さ)」が向上しても「質(正確さ・適切さ)」は必ずしも向上しない スピーキングの即興性は、「半即興」と「純即興」の比(維持率)が90～73%であり、各能力の位置づけについて再検討する必要がある
実用英語技能検定	取得級が「2級」以上の生徒数が、研究対象のクラスで約2.5倍、学校全体で約4倍に増加した 2級以上の合格率を上げるための特化した指導(いわゆる「英検対策」)の徹底も必要と考えられる
GTEC for Students	「社会で必要とされる英語力」であるTOTALの550点に到達する時期が、1年生の12月(平成18年度入学生の平均値)となるなど加速的に前傾した。 とくにライティングのスコアは、1年生、2年生ともに今年度5月時点から30点以上向上し、12月時点で130点を超えるなど、飛躍的に伸長した

WSA テストによる論証能力の測定は、平成16年12月～平成18年12月まで行った。測定時期は4月、7月、12月、2月、対象は国際コースすべて(約120名)であった。

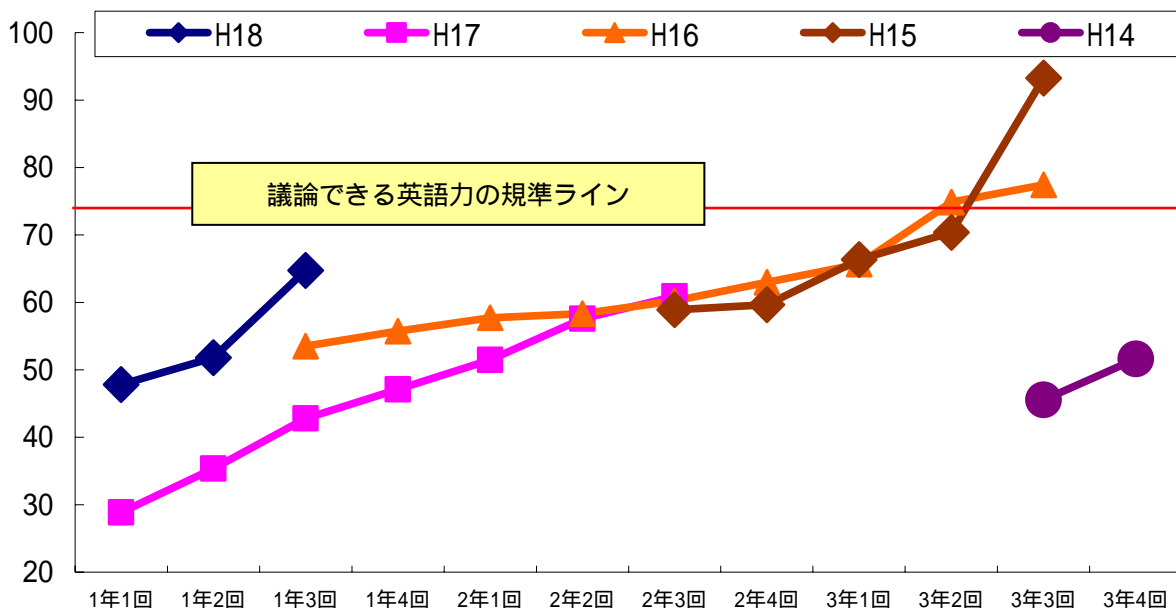


図2 . SPEAKING の流暢さ (WPM) における入学年度別の推移

6 今後の研究計画

(1) 研究成果物の継続使用

・ステップアップ・プログラム (SUP)、SUP 準拠シラバス、トレーニング指導マニュアル、ワード・カウンターなどの成果物は、継続的に使用する。

(2) SUP 3 から SUP 4 への発展

・研究開発の成果をもとに指導フェーズの改善を試みる (図3)。

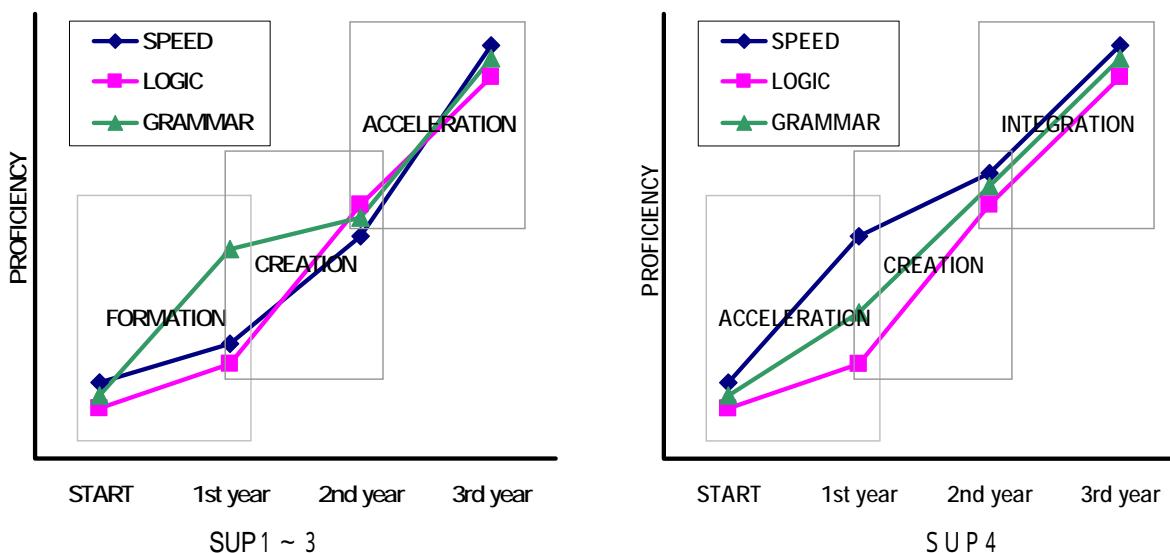


図3 SUP 1 ~ 3 と SUP 4 の指導フェーズごとの能力伸長のイメージモデル

運営指導委員 青木信之、渡辺智恵 (以上、広島市立大学)、能登原祥之 (比治山大学)

資料作成 西 巖弘 (SELHi 研究主任)

資料公開 <http://www.funairi-h.edu.city.hiroshima.jp/Frameset.htm>